

体験談

派遣先

ヨーロッパ

オックスフォード大学の思い出

第5回生 引田 弘道

(愛知学院大学教授)

平成元年4月、第5回留学僧として、イギリスに向かった。目的地はオックスフォード大学、ウォルフソン・カレッジ (Wolfson College)。当大学は首都ロンドンから高速バスで1時間弱の距離で、田園地帯にたたずむ静かな学園都市にある。都市に大学があるというよりも都市と大学が一体となっていると言った方が適切であろう。当大学は寄宿寮を兼ねる38のカレッジより構成されており、学生は基本的にいずれかのカレッジに所属する必要がある。筆者の所属したウォルフソン・カレッジは比較的設立が新しい大学院専用のカレッジであり、学部中心のカレッジに比べて留学生の割合は高く、世界各地から学生が参集していた。

指導教授はサンジュクタ・グプタ博士。ベリオール・カレッジ (Balliol College) のサンスクリット学講座教授 (Boden Professor of Sanskrit)。リチャード・ゴンブリッチ博士の⁽¹⁾令室。⁽²⁾夫妻は1年前、愛知学院大学教授の前田慧學博士の招きで来日され、1ヶ月間ほぼ名古屋に滞在さ

れた。筆者もご夫妻のお世話をしたことが縁となり、オックスフォード大学に特別研究員として、ヒンドゥー・タントリズムを研究する機会を得ることが出来た。ゴンブリッチ教授はスリランカ仏教の思想や文化・社会研究の第一人者であり、グプタ博士はオランダ・ライデン大学にても教鞭をとられたこともあり、筆者が師事したときはオックスフォード大学の非常勤講師を務め、ヴィシヌヌ教のタントリズムを研究しておられた。彼女の指導のもと、パーンチャラートラ派の基本文献、『サートヴァタ・サンヒター』の英訳に取り組んだ。とても難解なテキストであり、博士の指導がなければまったく理解できなかったであろう。

オックスフォードの一年は、大学附置の東洋学研究所 (Oriental Institute) での研究と個別指導、さらにボードリアン図書館などでの研究資料の探索に費やされたと言って良からう。コンパクトな大学都市であるため、移動も便利であり、カレッジの宿舍、研究所、図書館などを自由に無理なく移動できた。休日には緑豊かな郊外や公園、植物園の散策、ロンドン観光をして、イギリスの素晴らしさを満喫した。またケンブリッジ大学のノーマン教授の研究室を訪れ、教授の学問に対する真摯な態度、情熱に触れることができた。また前年度、名古屋大学の森雅秀氏 (現在は金沢大学教授) が第4回留学僧として、ロンドン大学の東洋アフリカ学院 (SOAS) に留学されていたので、氏とロンドンやオックスフォードで何度か一緒に楽しい時を過ごした。

同年10月16日から3日間、善光寺先住の故黒田武志老師がご令室と一緒にわざわざ日本から私と森さんを激励に来られた。ロンドンとオックスフォードを見学され、私たちへの労いと研究をさらに深めるようにと期待を込めて述べられた。老師の突然のご訪問により、私たち二人は留学僧としての自覚をもって研究を推進していくべきことを改めて痛感した。森さんはその後、ロンドン大学で、筆者は東京大学で学位を取得した。これも老師の激励の賜物だと深く感謝している。(写真、中央が黒田老師、向かって左が森雅秀教授、右が筆者)

留学の醍醐味は世界的に有名な教授から直接指導を受けることが出来るのは当然のことながら、多くの世界的な友に出会う機会があることにもある。文法学の大家ジム・ベンソン (James Benson、Oxford) とアーヴィン・カーシユ (Eivind Kals、Cambridge)、フランス人でヴィシユヌ教のヴァイカーナサ派研究の大家ジェラルド・コラ (Gerard Colas、CNRS)、ジャイナ教の専門家W. J. ジョーンソン (Johnson, Cardiff) などの博士たちである。さらには異分野ではあるが、数多くの日本人の研究者とも親交を深めることができた。彼らは今でも良き友である。当時、皇太子妃雅子様が当地のベリオール・カレッジに外務省の研修生として在籍しておられた。ご成婚直前のことでもあり日本人たちと出会うと、よくこの話題に花が咲いた記憶がある。

横浜善光寺留学僧育英会のおかげで、海外に長期滞在し、学問を深めることができた。また

海外の学者たちとも交流を持つきっかけも出来、日本国内においては不徹底なままであった研究の成果も出すことができた。現在、通信技術の発達により、この場に居ながらにして世界と交信し、リアルタイムで情報を得ることが可能となった。しかし肌で海外の風を感じ、現地の人々と直接面と向かつて意見を述べ合うことに優るものはないであろう。今後もより多くの若者が海外に飛び立つことを望む。

